大学文書館へ行こう

第6回「お宝美術品から覗く」

北海道大学大学文書館　井上　高聡

前列中央に橋口文蔵校長、その左に佐藤昌介教授（1891年）

今回は、ちょっとしたお宝美術品を二点紹介します。

黒田清輝の作品

一点目は、一八八八～九一年に札幌農学校長を務めた橋口文蔵（一八五三～一九〇三年）の肖像画です。橋口は薩摩藩士の家に生まれ、二十二歳でアメリカに留学してマサチューセッツ農科大学などに学びました。一八八一年の帰国後は、開拓使・農商務省・北海道庁において十年間にわたり、西洋科学・技術に通じた人材として農政部門で重用されました。

黒田清輝作「橋口文蔵肖像画」（大学文書館蔵）

作者は黒田清輝（一八六六～一九二四年）、近代日本を代表する洋画家です。黒田も薩摩藩士の家に生まれ、後に子爵となる伯父黒田清綱の養子に入ります。橋口の妻は黒田清輝の義姉（清綱の長女）にあたり、また、孫が黒田清輝の養子となって子爵を継ぎます。橋口と黒田はたいへん近しい親類でした。

肖像画の額縁の裏書きには「亡父橋口文蔵画像　黒田清輝筆／札幌農学校御中　明治卅七年七月　男橋口兼清拝」と書かれています。札幌農学校の校友会誌『文武会会報』第四六号（一九〇五年九月）には、橋口の遺族が黒田に肖像画の製作を依頼したこと、黒田は門弟に描かせて自身はそこに加筆をしたらしいことを記しています。

この肖像画はかなり傷んでいましたが、二〇一七年、専門家が修復し、元の作品の雰囲気を取り戻しています。

有島生馬の作品

二点目は、橋口文蔵の次の校長佐藤昌介（一八五六～一九三九年）の肖像画です。二〇一六年十一月、佐藤ユリ氏からご寄贈いただきました。佐藤昌介は札幌農学校第一期生です。一八九四～一九三〇年の三五年以上にわたり、札幌農学校長、東北帝国大学農科大学長、北海道帝国大学総長として北大を牽引し続けました。

肖像画の額縁の裏書きには「M.Arishima 3 April 1912／贈呈　佐藤博士／明治45年4月3日　佐藤博士就職二十五年記念祝賀会」と記されています。東北帝国大学農科大学長の佐藤昌介の在職二五周年にあたる一九一二年、同僚などが祝賀記念品として贈呈したものです。共に佐藤の教え子にあたる、農科大学助教授森本厚吉（一八七七～一九五〇年）が取り仕切り、予科教授有島武郎（一八七八～一九二三年）が助力しています。

有島生馬作「佐藤昌介肖像画」（大学文書館蔵）

森本の依頼を受けた有島武郎は、一九一二年一月二八日、実弟でフランスから帰国したばかりの新進画家有島壬生馬（みぶま）（一八八二～一九七四年）に手紙を送り、「写真的の肖像を所謂名の知れた名家に嘱託」したいので「適当の人御紹介」願いたい、「報酬は額縁送代共百二十円」と伝えます。結局、壬生馬自身が製作を引き受け、兄武郎は三月二日付けの手紙で、佐藤の体つき、相貌の細かな特徴、顔や頭髪の色などに加え、性格についても詳しく書き送ります。「平常寡言なれども一度破顔寛話すれバ一派の春風を呼び来る二足る」といった表現も見られます。五月二二日付けの手紙には「学長の肖像は学長には存外気に入」ったようだと記しています。

肖像画の作者有島壬生馬は、個性主義・理想主義を掲げた文芸思潮「白樺派」を代表する洋画家です。「有島生馬（いくま）」の筆名で活動しました。「白樺派」は志賀直哉・武者小路実篤を中心に一九一〇年に始まり、有島兄弟も主要メンバーでした。生馬のこの作品は「白樺派」初期の美術作品にあたります。

美術品も歴史的資料

「なぜこんな作家の作品が？」と疑問を持って、作者とモデルの関係、製作の経緯などを探ってみると、大学の歴史が意外な人物とすれ違ったり、大きな文化運動をかすめたりしていることが分かります。美術品は鑑賞の対象であるばかりでなく、大学の歴史の覗き穴となる歴史的資料でもあります。

1912年ころの有島武郎